

記念講演

柚木麻子さんによる記念講演 「図書館とわたし」

今年の記念講演は、この冬『伊藤くん A to E』が映画化された作家の柚木麻子さん。読書や図書館、作家、出版界などについて、たくさんのお話を語っていただきました。

はじめに、埼玉の読書への取り組みについて触れてくださいました。春日部の女子高では、読書熱心な生徒の様子に「こんなにいっぱい、まだ本を楽しみにしてくれている方がいるんだな」と嬉しい思い出があるそうです。



◎図書館ユーザー柚木麻子と出版不況

「図書館と作家の話は非常にデリケート」とし、書店によっては作家が図書館のイベントに行くことを嫌がることもあると明かしました。背後には出版不況があるとしつつ、「税金を払っていて、みんな図書館で本を借りる権利がある。その権利を版元の一存でなくせていうのは乱暴」とのご意見でした。ご自身も幼い頃からの図書館ユーザーであり、いくつもの図書館をハシゴしていたそうです。「すごく古くて本の匂いがして日当たりが悪くて暗くてじめじめしているところがなんとも言えず落ち着いた」という言葉に共感した人も多いのではないのでしょうか。図書館でたくさん本を借りて読んでいたために、自然と作家になりたいと思うようになったそうです。しかし、デビューしてからの8年は本を借り

ていないとのこと。「今まで図書館にお世話になった分の恩を返したい」という思いから、2日に1回は図書館を訪れても、本はなるべく購入し、読んだ本の多くは図書館のリサイクルコーナーに寄付しているそうです。

◎本を読むといいことがある？

本を読むとこんないいことがあったという話や子どもに本を読ませるような話をするよう頼まれることもあるそうです。しかし、「どう考えても本を読んでもいい人にはなれない」と言います。講演中、何度かこの話題に触れましたが、本を読んでもいい人にはなれない、優等生にはなれない、頭も良くならない、とハッキリおっしゃっていました。知識は増えるが、勉強には活きない。想像力が育つぶん、色々なことが気になっていちいち立ち止まるようになる。本のいいところを挙げたかと思えば落とすトークは、会場を沸かせていました。そんな中、柚木さんが唯一落とさなかった本のいいところは、「日常が輝く」という点でした。海外に行っただけで興奮するのは、翻訳小説をたくさん読んできたため、ちょっとしたことが嬉しくてたまらないからだ、本で経験したことだと悲惨な目にあっても楽しいと思えるのだと語っていました。

◎どうやったら読書家になるか。

「ひまだから読んだら何かしらハマったのが読書家の正体」だと暴きました。読書家の子はだいたい家に本がたくさんあるそうです。強制されて読むのは楽しくないという点も強調されました。『文豪ストレイドッグス』から中原中也を読むようになった人がいることを例に挙げ、ドラマの原作や、好きな芸能人の好きな本など、入口はなんでもいいと言います。「本人のとっかかりは本人が見つかるものなので、その時に満たしてあげられる環境が、無料でどんな本でも貸し出してくれる環境だと思う」と図書館を評価しました。「高い税金

を払っているのだから、利用しなければいけない」とまでおっしゃいます。気軽に無料で本を試せることによって読書家が育ち、将来的に本を買ってくれるのではないかと語ります。潤沢に本がある環境をつくっていく図書館に貢献したいという思いから、講演の誘いに応じるようにしているそうです。

◎読んだ知識で大冒険

多くの本を読み、少しのことで「日常が輝く」柚木さんは、イギリスを訪れた際、「道を歩くだけでキャーッ」となる状態だったそうです。道や風景だけでなく、ありとあらゆる小説に登場した食べ物を食べたそうで、「小説を読んでいなければあんなに無理してたべることにはなかった」と振り返りました。また、泊まったホテルがたまたまプロムの会場で、何が何でも中に入りたと思った柚木さんは自ら交渉し、会場入りを果たします。このような「本がなければできなかった大冒険」も多く経験されているようです。

◎「VS じゃなく WITH だ。」

これは朝井リョウさんの言葉だそうです。さまざまなカルチャーの中で、本がそれとどう関わっていくか。たびたび上がる「今の若者は娯楽が多すぎて本が読めないのではないか」「ゲームとかやっていると小説を読まなくなるんじゃないか」「マンガなんか読んでちゃだめだ」と言った声に対して、柚木さんは否定的です。ネット中毒でも読書家になれる。娯楽が多いからこそより楽しめることもある。どのカルチャーにも意味があり、それぞれが助け合って面白くなっていくといいと、「共存」を訴えています。

◎質疑応答

Q. 小学校の学校図書館との関わりや読んでいた本について教えてほしい。

A. 1年生の時は、リンドグリーン。2年生は



日本のもの。4年生になると翻訳ものを読み、5年生は赤川次郎期だった。乱読だったが、寄宿舎ものは全部読んだ。異文化がわかって、女の子が出てきて、その女の子が元気っていうのがすごく好きだった。小学校の図書館はあまり使えなかった。

Q. 『アッコちゃん』シリーズは、先生の中で完結している？続編は？

A. 読者さんがたくさんいる作品。楽しみにしてくれる方には申し訳ないが、今のところ続きは思いついていない。ミチコが成長したので、一応は完結。

Q. 『本屋さんのダイアナ』は誰かに宛書している？

A. ネットですごく言われている。頭にはあるが、その子がひどい目にあうシーンがあり、傷つくかもしれないから公表はしていない。
追加 Q. ドラマ化の際に、作家の意見が通ることもある？

A. 『本屋さんのダイアナ』の映像化はない。少女時代から大人になっていく時に、似た女の子を探さなくてはいけなくて、そこまではもらえないと思う。

柚木さんの講演には、最近読んだ本や、幼い頃に読んだ本、とてもたくさん本が登場し、メモの手が止まりませんでした。どの本も読みたくなってしまい、もしこれがビブリオバトルだったらチャンプ本が選べずに苦悩したことと思います。

柚木さん、とても楽しい時間を過ごさせていただき、ありがとうございました。